書 評

エネルギージャーナル社

清水 文雄
青山 貞一 編

フューチャーR & Dジャパン

評者 坪 村 宏*
Hiroshi Tsubomura

日本の科学・技術の発展は目覚ましいものがあり，欧米諸国と肩をならべる所まできている．本来，資源の少ないわが国にとって科学・技術こそ生きる道であり，その一層の発展が望まれる．本書は日本の科学・技術の現状と問題点についての，十数名の専門家による分担執筆であるが，だいたい三部に分けられるように思う．第一部は国及び民間企業による研究・開発の現況であり，種々の統計的データがあげられている．更に今後の動向を示すものとして，科学技術会議11号答申，基盤技術開発センターの活動状況などの行政的な動きものべられている．第二部は地方自治体の科学・技術戦略として熊本県と神奈川県の例が述べられ，また地域社会のはたす役割も述べられている．第三部は日本人の特質，今後の発展性などについての比較的自由な個人的意見がいくつか収録されている．

まず，日本の科学技術開発のための資金の現状であるが，1983年度において国の支出額は1兆4千億で，このうち国・公立大学に約6000億，私学に約600億，残りが国・公立研究所，特殊法人などに流れている．これに対し，民間企業の研究開発資金は5兆円に達し，そのうち企業が国から受けている資金は800億（1.7%）にすぎない．このように民間の資金の割合が大きいのが日本の特色である．近頃話題になっている技術貿易については，新規に締結された分については1973年いらい既に黒字に転じているが，従来からの継続の分を加えるとわずかに赤字である．また，日本は応用・開発に強く基礎に弱いと言われるが，研究開発費を見る限りではその基礎への配分は14%であってフランス（20%），西ドイツ（19%）に比べると少ないが，米国（12%）よりは多くなっている．

本書の一番大きい特色は第二部の地域社会の問題を扱った部分にあるかもしれない．細川熊本県知事による熊本県の取り組み状況，神奈川サイエンスパークの構想，福島県，長野県などにおけるローカルエネルギー開発状況などそれぞれ興味ぶかいものがあった．近年，学術や経済の東京地域への集中化の傾向が強まっているが，これはいろいろな点で限界に達しているのみならず，過度の集中はかえって発想の単一化をもたらす危険がある．ローカルな経済・文化の発展が新しい発想やオリジナリティにとんだ人材の育成に繋がり，ひいては日本の将来の発展をもたらす新しいアイディアを産み出すことが期待される．これは評者の個人的意見であるが，この部分の執筆者がいずれもそれぞれの地域の経済と文化の為に情熱をもって取り組んでいる姿勢がうかがわれ，その情熱が何か新しいものを作り出す兆しの様に思われた．

最後の第三部は前にも触れたようにどちらかといえば個人的なエッセイであり，その受け取りかたは読者によりまちまちであろう．評者の率直な意見としては，多少あらずもがなの部分も含まれている様に思われる．ただ最後の座談会は面白い．産・官・学の連係は今後の日本の科学・技術の推進の為に極めて大事なことであるが現状では種々問題があり，改善すべき点が多い．この点についていろいろ適切な指摘が行なわれている．官の側の，時代に即しない姿勢にも問題があるが，むしろ最も問題があるのは今日の日本の大学であるかもしれない．国立大学に在職する評者としては耳の痛い点があった．しかしこの産・官・学の協力問題については三者が互いに他を詰っていても解決することでなく共に相当な覚悟で取り組む必要があろう．

〔体 裁〕 A5判267ページ
〔定 価〕 1,800円（送料実費）
〔発行所〕 エネルギージャーナル社
〒160 東京都新宿区四谷1－20 岩井ビル
TEL 03-359-9816

* 大阪大学基礎工学部合成化学科教授
〒560 豊中市待兼山町1－1